

衆生済度の在り方に関する考察

-ネパールに流布する仏教文献を中心に-

スタン・シャキヤ

多くの仏伝文献が説くように、シッダルタ王子は生老病死の苦しみからの脱却を求めて出家したが、それは成道によって達成された。自らが悟った法を世の中の人びとに説いたとしても理解されないことを考えて、しばらく他者への説法を躊躇していたが、梵天達の懇願を契機に法を説き始めた。このように、成道後に釈尊が説法を決意した理由は、「大勢の人の利益のために、大勢の人の幸福のために、世間の憐れみのために」(bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai)、すなわち衆生を済度するためであるとする。この転法輪の活動は涅槃に入るまで続いた。種々の目的のために種々の場所で説かれた膨大な教えは、経典としてまとめられた。後世になるにつれ、経典のエッセンスを集約する形で特に読誦を目的とする陀羅尼、賛歌、真言などが編纂され、言葉の効力を衆生済度に結びつけるようになる。

ところで、娑婆世界で暮らす衆生たちはあらゆる苦しみに耐えながら生き抜く。言うまでもなく、「命あるもの」、「存在するもの」を意味するサンスクリット語 ‘sattva’ (√asの派生語)の漢訳のひとつは衆生である。一方、衆生の新漢訳として玄奘以降は有情「情有有するもの」が用いられた。同様に、チベット語では ‘sems can’ (心を有するもの)と訳し、有情と同じ意味である。つまり、衆生は「心を持つもの」であると言える。また、この心は、広い意味で欲望の依り所である。これは人間の生命を支える煩悩そのものとしても解釈できるであろう。衆生が有する心または欲望が原因となり様々苦しみは生まれる。それらを制圧することができた時、悟りが得られるのであり、これこそが究極の救済である。

仏教思想の発展と共に、仏果の獲得に導くことだけが衆生済度とせず、無病・財宝・長寿など多様な現世利益への応えが求められるようになった。そのために用いる文献が多く編纂されたが、ここではその一部で、特にネパール仏教に流布している仏典類に焦点を当てる。

ネパールでは、『ダーラニー・サングラハ』(陀羅尼総集)と題する古写本が多く所蔵されている。この総集にはインド撰述文献もあれば、後にネパールで編纂されたと思われる陀羅尼、讃頌なども多々収録されている。その数は一貫性に欠けており、200余りの文献が書写された写本束も現存する。今回は、『八千頌般若経』、『パンチャー・ラクシャ』、『ナーマサンギーティ』の経典類に加え、『ダーラニー・サングラハ』にも含まれる『十波羅蜜多讃頌』、『多羅女尊百八名讃』、『ヴァスダーラー女尊百八名讃』の讃頌を取り上げる。さら、『大乘無量寿経』や『一切悪趣清浄タントラ』などを典拠とする「パターン化された陀羅尼」(om namo bhagavate 尊名……/tad yathā/ om 尊格の特徴…svāhā/)についても述べる。いずれも衆生の苦しみを除去から悟りの獲得まで、幅広い済度を対象としている。本発表では、それらの内容を吟味しながら、多様化する衆生済度の在り方について考察していく。